

研究主題「造形活動の過程における試行錯誤を重視した指導の工夫

- 色彩の学習の実践を通して -

東京都教職員研修センター 研修部教育経営課
町田市立成瀬台中学校 教諭 大塚雄史

研究のねらい

中学校学習指導要領解説 美術編では、「すべての創造は試行錯誤から生まれると言われているように、この能力は創造性の育成にとって極めて重要な能力であり、一人一人の個性を生かしながら確実に育てていく必要がある。」と示されており、中央教育審議会においても「感性を働かせて思考・判断し、創意工夫しながら表現したり作品を鑑賞したりするという一連のプロセスを働かせる力を育成することが求められている。」ことが課題として討議された。

このように美術における試行錯誤は、生徒の学習活動において大きな指導の手がかりになると考える。そこで、美術の指導における試行錯誤の活動の必要性を明らかにし、生徒の試行錯誤の活動を重視した指導を行うことで、自己の創造的な表現力を高めることができると考えて本研究の主題を設定した。

研究の内容と方法

1 基礎研究

(1) 「美術の創造」と「中学校美術」で育てる基礎的能力

美術の創造は、手や体を使って考えながら自らの考えを表し、さらに表しながら考える循環的・発展的学習の過程の中でよりよいものとして具体化していくことで育っていくものである。また、中学校学習指導要領解説 美術編では、美術の創造的な表現力を育成するためには、「中学校美術で育てる表現の基礎的能力」（以下、「表現の基礎的能力」という）を身に付けることが重要であり、これらの表現の基礎的能力は、一連のものとして総合的に往きつ戻りつしながら生徒に身に付けさせていくものであると示されている。このことは生徒の表現の基礎的能力の育成において試行錯誤の活動が重要であることを示していると考えられる。

(2) 「創造的な表現力」と「表現の基礎的能力」を関連的、総合的に働かせることができる試行錯誤を重視した指導の必要性

美術における生徒の試行錯誤の活動とは、学習活動において与えられた課題に対し、「目的意識をもつ」「工夫する」「試す」「判断する」という学びの過程を繰り返しながら、多面的な考え方や方法で課題解決に取り組み、自己の表現を導き出すことと考えた。この試行錯誤を重視した指導を行うことで、生徒は自己のイメージを表現するために、色や形、材料について個々の生徒の必要性に応じて、これまでの授業で身に付けた表現の基礎的能力と自己の創造的な表現力を関連的、総合的に働かせ、自己の創造的な表現力を高めていくことができると考える。

(3) 美術における「一人一人の個性を生かす」ことについて

美術の学習では、生徒は自己探求することで自己の思いを確かめ、さらに自己の表現を探求していくことが求められる。美術において「個性を生かす」とは、自己の表現を探求していく中で、他の人の考えや美術作品等のよさを認めたり、自己の考えとの違いに気付いたりすることで、自分らしさを認めて、個性を生かした表現を生み出すことと考える。

2 研究仮説

学習活動の過程において、生徒が自己の思いを確かめながら、多面的な考え方や方法で課題解決できるように試行錯誤する指導を行うことで、生徒は自己の表現の必要性に応じて、表現の基礎的能力と自己の創造的な表現力を関連的、総合的に高めることができる。

3 試行錯誤の活動における指導内容の重点

生徒が自己の表現の必要性に応じて、表現の基礎的能力と自己の創造的な表現力を関連的、総合的に高めるための手立てとして、生徒の試行錯誤の活動に重点をおいた指導が必要となる。そのための指導内容の重点として、次の3点が必要であると考えた。

(1) 試行錯誤するための手がかりをもたせる指導

生徒は日常生活の中での体験や経験を通して、そこから感じたり、他者から示唆を与えられたりしながら、色や形、材料に対する感性をはぐくんでいく。実際に色をつくる、形に切る等の前段階として、色や形、材料について体験的に理解する学習の過程を設定することで、生徒が色や形、材料に対する感性を高めたり、主題を確実にしたりする等、試行錯誤させるための手がかりをもたせて、学習活動に取り組みさせる。

(2) 試行錯誤の活動を繰り返していく中で、自己の表現の変容を確認させる指導

美術の創造は、循環的・発展的学習の中で育っていくものである。その点において試行錯誤の活動を繰り返していくことで、生徒は自己の表現内容を広げたり、時には絞り込んだりと変化させながら、自己の思いを確かなものにしていくことが必要である。そのためには、生徒にワークシートの記述や友達の意見を活用し自己の表現をしっかりと見つめさせ、その変容を確認させながら試行錯誤の活動に取り組みさせる。

(3) 題材や技法等に対して生徒が自信をもって取り組むことができる指導

生徒は「イメージしたものと違う」「もしも間違えたら」等、友達に見られたくない、失敗したくないという思いから、自己の表現を試すことに消極的になってしまう。そのため題材や技法を工夫し、生徒が自信をもって色や形、材料を「試す」ことができるようにすることで、試行錯誤の活動を促し、自己の課題解決に向けて積極的に取り組ませる。

4 検証授業における具体的な指導の工夫

題材名「自分の中にある色を見つめる」 第1学年（全8時間）

(1) 「試行錯誤するための手がかりをもたせる」ための指導の工夫（グループ学習の導入）

事前学習としてグループ学習を設定し、友達とのかかわりから生徒に色に対する自己のイメージを確認させたり、他者のとらえとの違いに気が付かせたりすることで、色に対する固定的なとらえから離れさせ、新たな気付きを引き出す。このことにより、生徒に試行錯誤の手がかりをもたせることができると考えた。また、グループ学習の題材の設定において、学習活動への取り組みやすさと色について体験的に理解させることが、具体的な試行錯誤の活動の手がかりになると考え、以下の点を工夫した。

グループ学習における題材の工夫（「色見本」の利用と「造形遊び」の要素の導入）

色見本の利用は、色を混色してつくることを苦手としている生徒に対して、色をつくる力の優劣を感じさせずに、取り組みやすい活動になると考えた。また、生徒の小学校時代の造形活動を生かしていくことを考え、図画工作科「造形遊び」の「造形活動の過程における造形行為そのものを楽しみ、その過程で思いをふくらませていく」という要素を取り入れ、

作品に使われている色を友達と一緒に探したり、「四季」の色を友達と話し合ったりしながら考えていく活動を設定した。

グループ学習における学習活動の展開の工夫

学習活動を「A：生徒の色に対する固定的なとらえを取り除く」「B：各生徒に色に対する自己の考えをもたせる」「C：友達とのかかわりから色について新たな気づきを引き出させる」と3段階に設定した。

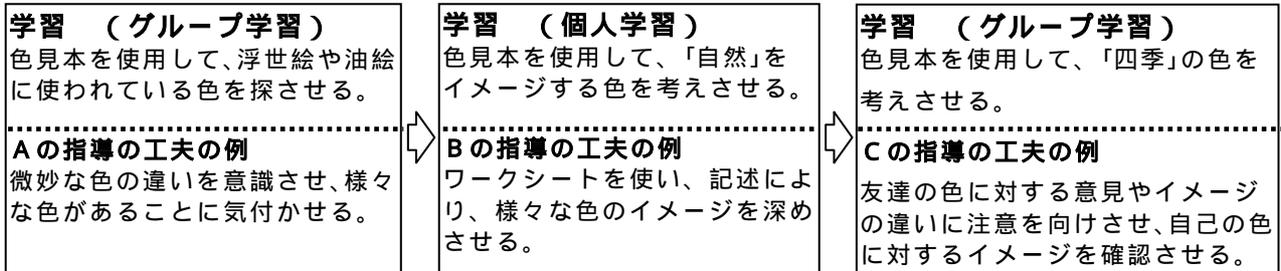


図1 グループ学習における学習活動の展開と指導の内容

(2) 「試行錯誤の活動を繰り返していく中で、自己の表現の変容を確認させる」ための指導の工夫（ワークシートの活用）

ワークシートを活用して、生徒に自己の色の印象を言葉で記述させる。また、記述した言葉から自己の色のイメージを広げさせる。この相互的作用により自己の色のイメージを探させ、新たな発想や構想につなげさせる。また、毎時間の学習の中で生徒が考えたことや感じたこと等を記録させ、自らの学習を振り返らせることで、自己の変容を確認しながら試行錯誤の活動を意識させて造形活動に取り組ませる。

(3) 「題材や技法等に対して生徒が自信をもって取り組むことができる」ための指導の工夫

本研究では、試行錯誤しながら自己のイメージにすり合わせて「つくり直すことができる技法」を取り入れた。ここでは、八つ切りのケント紙に直接着彩するのではなく、10cm 四方程度のケント紙に色を塗り、それらを組み合わせることで自己のイメージに合わせて、配色や色の違いによる変化を確認することができる方法を取り入れた。

5 検証授業における生徒の「試行錯誤の活動」と「創造的な表現力」に関する考察

(1) グループ学習による生徒の試行錯誤

表1 グループ学習における生徒の意識の変容

| | 学習・終了後の生徒のワークシートの記述 | 学習 終了後の生徒のワークシートの記述 |
|---|--|---|
| A | 考えるほどにイメージが広がって、思い込みにとらわれないということが大切だと分かりました。 | 身の周りのものが、それぞれ個性をもって、色をつくり出している。それが自然の色なのだと思えます。 |
| B | 実物と自分の思っている色は違うということが分かった。次から制作に活かしていきたい。 | みんなが思っている四季の色は似ているもの、違うものがあった。やっぱり、人の考え方は違うなと思った。 |
| C | 色見本はごく一部の色でしかなかった。(思っていた以上に様々な色があった。) | 色見本にないような色を作りたいです。色見本の中から探す探究心も強くなった。 |

学習、で、生徒は自己の色に対するイメージを確かめ、学習における友達とのかかわりから、色に対する個々の考え方の違いに気付いた。色に対するイメージの違いに注意させて話し合うように指導したことで、生徒は自己のイメージを振り返り、さらに友達の見解について考えながら、自己の色のイメージを探求していった。このような試行錯誤による色のイメージの探求により、生徒は自らの考えに自信をもち、このことが制作への意欲につながったと考える。

(2) 「ワークシートの活用」による生徒の試行錯誤

生徒は自己の作品のイメージを記述し、そこから新たな色を発想したり、新たな色からさらにイメージを広げ記述内容を変えたりする等、自己の作品のイメージとその記述の相互のかかりから自己の表現を見つめていた。また、毎回の学習の中で感じたことや考えたことを記述させたことで、生徒は自己の学習に対し目的意識をもち、自己の表現を見つめながら、主題や表現をより自分らしいものにつくりあげていた。このような循環的、発展的な学習において、教師が生徒の作品やワークシートの記述、学習に対する戸惑いや思考の深まりの様子等から多面的に生徒の考えを理解する。そして、ワークシートの記述で生徒の創造的な考えが深まっている部分にコメントや下線を付けて示したり、個別に指導を行ったりしながら、生徒の考えを尊重した指導を行った。これにより、生徒は自己の表現に自信をもち、主体的に造形活動に取り組むことができたと考える。このようなワークシートを通した生徒と教師のやりとりが、生徒の自己の表現に対する試行錯誤の活動を促し、創造的な表現につながっていったと考える。

(3) 「つくり直すことができる技法」による生徒の試行錯誤

「つくり直すことができる技法」により、生徒は何度も作品の配色や配置を変えたり、新たに思いついた色を加えてみたりしながら作品のイメージの変化を比べ、より自己のイメージに近づけようと考えることができた。この時、教師はある一部分の色を変える、色を重ねて配置する、新たな色を加えてみる等、柔軟な技法を生徒に提示することで、生徒は色について体験的にとらえることができ、生徒の積極的な試行錯誤の活動を促すことができた。このような試行錯誤の活動を繰り返すことで、生徒は主体的に造形活動を楽しみながら、体験的に表現の基礎的能力と創造的な表現力を高めていくことができると考える。

研究の結果と考察

生徒の造形活動の過程における試行錯誤を重視した指導とは、制作過程で生徒が自己の内面や作品、友達の考えや他の美術作品等、自他とのかかりから自己の考えを広げたり、振り返ったり、試したりすることで多面的に自己の表現を見つめ、これまでの経験だけでは得られない新たな表現を作り出すことができるように指導を行うことである。そのためには、学習展開の工夫や自己のイメージを記述させる指導の工夫、題材や技法の工夫により生徒の試行錯誤が活発になるよう、循環的、発展的に授業を計画することが必要である。そして、学習過程において、生徒の作品やワークシートの記述、学習に対する戸惑いや思考の深まりの様子等から、個々の生徒が必要とするものが「技術的な指導」なのか「自己のイメージを確立するための指導」なのかをとらえ、生徒の試行錯誤に沿った指導を教師が行うことが必要である。このような生徒の試行錯誤の活動と教師の生徒の試行錯誤の活動に沿った指導より、生徒は造形的な創造活動に主体的に取り組み、創造的な表現力を高めていくことができると考える。

今後の課題

今後、本研究における試行錯誤を重視した指導の工夫を他の題材で、どのように生かすことができるのかを考え、中学校3年間での系統的な指導について年間指導計画の中で検討していく。また、試行錯誤の活動を通した創造的な表現力の育成を実現させることができるように、小学校図画工作や高等学校芸術(美術、工芸)との接続を考えた指導計画や指導の内容・題材等を検討していくことが課題である。